

イメージ表現を加味した財産犯対象プログラムの 視点取得の視覚化

畑村 晶子[†]

Visualization of perspective taking in the property crime target program with image expression

Akiko Hatamura

1. はじめに

日本では、刑事収容施設及び被収容者等の処遇に関する法律（以下、「刑事収容施設法」とする。）において、受刑者に刑務作業、改善指導、教科指導といった矯正処遇を義務付けている。

改善指導は全ての受刑者に付される一般改善指導と、特定の事情（問題性）の改善のために、通達で規定された標準プログラムを受ける特別改善指導とがある。一般改善指導の中の行動適正化指導には、窃盗、詐欺、横領等の事犯者である財産犯対象のプログラムがあり、筆者が勤務する刑事施設においては、「財産犯再犯防止指導」という名称で実施され、筆者も携わっている。改善指導を実施する目的は、刑事収容施設法において次のように定められている。

- 一、犯罪の責任を自覚させる。
- 二、健康な心身を培わせる。
- 三、社会生活に関与するのに必要な知識・生活態度を習得させる。

財産犯対象の特定の標準プログラムは、通達等によって定められていないことから、各施設においてオリジナルのプログラムを作成して実施している経緯がある。筆者が勤務する刑事施設においても、上記の3つの目的を軸としながら、少年刑務所という若年受刑者を収容しているという特性を踏まえ、可塑性に期待し、再犯時に問題となる本人の偏った自己中心的な視点にアプローチをするために、筆者は指導プログラムを作成し、「財産犯再犯防止指導」として所長指示で定め、クローズドのグループワークによって実施している。同指導は、筆者が担当する約3年前に「窃盗再犯防止指導」として発足して実施しており、その内容は、講義形式で各受講者の犯罪行為を振り返り、反省を促すものであった。その方法によって、内省を深めていたことは否定しないが、反省の色が強ければ強いほど優秀な成績を付けられ、仮釈放につながっていた印象があっ

た。受講者が提出してくる課題には、お決まりの定型文が並べられているように感じる一方で、やり取りの中に見える受講者の反応は、社会性には欠けるが、素直で仲間思いであり、共感性が低いわけではなく、むしろ友達思いであるのに、なぜ被害者の気持ちは考えられないのだろうかと思っていた。共感性については、犯罪によって受刑する人たちは共感性が低いから犯罪をするのだと考えることは自然なことのように思われるが、実際には、受刑者の共感性が低いということは一概に肯定することはできず、人、場面によってアンバランスな共感性を持っているということ、指導を通して実感していた。そのことは、河野ら（2013）の研究において、「犯罪者の示す共感性は、表出された行動としては共感的ととらえられるようなものであっても、質的には未熟なものである可能性が高い」と言及されている。その質的に未熟な共感性とともに、「自他の視点の違いを認識し、他者の立場から他者の欲求や感情、思考や意図などを推し量り、社会的な観点で判断する能力」（Selman,1976）である視点取得能力の欠如や、社会的視点取得能力の発達段階（Selman, 1976）の水準の低さが、同指導の受講者に共通していることから、筆者は指導の軸を共感性と視点取得能力の向上に定め、指導内容を改定することとした。

指導の各単元は、「自己の振り返り」、「財産犯に関する実話や絵本を題材とした討議」及び「自己の未来像をイメージすること」を盛り込んだ「旅」仕立ての構成である。講義形式からグループワーク形式に変え、受講者には毎単元で話し合ったことをもとに、宿題でワークブックに取り組ませることとした。

筆者は受講者の反応を確認するために、当該指導前後に、鈴木・木野（2008）が作成した「多次元共感性尺度」（以下、MES）を用いて、効果の検証を行ってきた。MESは点数が高いほど、その傾向があるというものであり、これまでの結果については、統計的手法（t検定、5%水準）

[†]2022年度修了（臨床心理学プログラム）

によって、筆者が目的としている視点取得能力の向上が、当該指導を受講したことによって達成できているとは言い難い結果となっている。そこで、MESの効果検証結果では見えない、指導過程における共感性や視点取得能力の変化を視覚化することを目的として、本研究では、俳画的箱庭（水島、1985）を用いることを検討した。この俳画的箱庭は、B5版の白い画用紙の上で紙粘土製の人形と木、草、石を基礎材料として与え、自由な表現によって情景を作る方法をより簡素化したもので（俳画的の「俳画」とは言葉（句）を絵で表現する、または句と絵から成り立つ書画共存形式の絵を表すもの）、水島が「最も簡潔な表現により、余白に豊かな情緒を織り込むことができる」として、カウンセリング等で用いている技法である。簡潔な表現を、少しの材料を用いてできることは、刑事施設の保安面においても採用しやすい。以上、刑事施設という枠組（保安面、時間枠）に大きく影響を与えずに実施できる点も考慮した上で、MESの数値的には表れていない、指導過程における個々の変化を視覚化し、今後の指導の在り方について検討することとした。

なお、本研究は、法務省矯正局成人矯正課長通知における倫理チェックリスト及び当該施設の許可を得ている。

2. 方法

本研究の対象者は「財産犯再犯防止指導」の受講者（施設内の基準によって選定し、審査会で決定した20歳から26歳までの男子懲役受刑者6名）である。同指導は、毎月2回設けられている矯正指導日という懲役受刑者の作業が免除される日に、教育を実施する教室において集団指導で実施している。1クール6単元で、約3か月となっており、本研究は、通常の集団指導の前・中間・後に、MES、俳画的箱庭、イメージ調査票を盛り込んだ指導構成とし（表1）、次の2.1から4までの要領で実施する。なお、指導前・中間・後に実施するものは、研究対象者の受刑作業等の時間帯に、教育の面接室で個別に半構造化面接の形で行う。

表1 指導構成

指導前	MES、俳画的箱庭（半構造化面接）
第1単元	オリエンテーション及び振り返り
第2単元	犯罪が自他に与える影響①
第3単元	犯罪が自他に与える影響②
中間面接	俳画的箱庭（半構造化面接）
第4単元	信用・信頼について①
第5単元	信用・信頼について②
第6単元	自己未来像について
指導後	MES、俳画的箱庭（半構造化面接）

2.1 指導開始前の半構造化面接時

本研究の同意を得た研究対象者に、MES、俳画的箱庭の順に、筆者が半構造化面接を60分の時間枠で実施する。

MESの尺度は、他者の感情や意見に影響されやすい傾向を表す「被影響性」、自己を架空の人物に投影させる認知傾向を表す「想像性」、相手の立場からその他者を理解しようとする認知傾向を表す「視点取得」、他者の心理状態について自己に焦点づけられた情緒反応を示す「自己指向的反応」、そして、他者に焦点づけられた情緒反応を示す「他者指向的反応」の5つがあり、全部で24問である。各項目に対し、「全くそうだ」、「そうだ」、「どちらでもない」、「そうではない」、「全くそうではない」の5件法で答えてもらう。所要時間は長くても10分程度である。

俳画的箱庭は水島（1985）のものを参考に、本研究では、保安面の配慮の他、人形一体にその人の世界をより表せると考え、紙粘土製の人形（約3センチメートル）一体のみを用いる。筆者が作成した紙粘土製の人形2種類（人肌に近い生成り色と無機質な白色）から、より自身にコミット感のある一体を選んでもらい（6名分、計12体を準備した）、その際に、その人形の前後の向きを確認し、正面に丸い直径5mm大のシールを貼って印をつけてもらう。その本人が選んだ人形を本人に見立てて、「この白い紙上で自由に人形を動かし、最も気持ちにぴったりするように置いてください」という教示をし、A4版の白い紙上で、本人の気持ちに沿った情景を表現してもらう。また、「何か付け足したいものがあれば、ここに準備しているものを使用し、付け足しても構いません」と補足し、鉛筆、クレパスも使用できることを説明する。表現後、何も書かれていない白い紙と紙粘土製の人形という刺激に触れた際の感触と、それをどのように認知、思考、判断し、どのような表現に至ったのか、人形を置いた位置から、その白い紙一面の360度を見回した情景には何があるかを質問する。

2.2 第1単元時及び第6単元時

集団指導の第1単元時と第6単元時には、開始直後の15分間程度で、指導の過程における個々の内的イメージの変化の確認と指導の流れを作る促進剤として、筆者が作成したイメージ調査票（縦12センチメートル×横18センチメートルの四角い枠と吹き出しが描かれたA4版の用紙）を実施する。筆者が「目を閉じてください。これから、今配った用紙に、今の自分のイメージを描いていただきます。今どのような思いでこの教室にいますでしょうか。温度はどうでしょうか。身体感覚はどうでしょうか」と全体を誘導し、「こんな感じ、というものが浮かんだら、目を開けて、その用紙の四角い枠の中に描いてください。絵でも字でも構いません。こちらが描いた枠の中に自由に描いてください。制限時間は5分です」と教示し、取り組んでもらう。5分経過したところで、「では次に、今描いた自分のイメージを眺めてください。思うことを右斜め下の吹き出しに書いてください」と教示する。7分程度経過した頃に全

体の手を止めてもらう。そして、各研究対象者が作成したイメージ調査票について、「今描いたものを皆さんで共有してみましょう」と伝え、個々に「何を描いたか」、「どのような理由でその絵（文字）を描いたか」を説明してもらい、グループ内で共有する。共有後、イメージ調査票は回収し、その後は指導の本題に入る。

2.3 中間面接時

中間面接は第3单元と第4单元の間の期間に行う。俳画的箱庭を用いて、半構造化面接を60分間実施する。教示方法や使用する人形は指導開始前の面接と同様とする。同じものを用いることで、定点観測ができ、一定の変化を見ることができる。作品は面接時間内に回収する。

2.4 指導終了後の半構造化面接時

指導終了後の半構造化面接においては、MES、俳画的箱庭の順に、教示方法や使用する人形は指導開始前及び中間面接時と同様に60分の時間枠で実施する。この面接時のみ、俳画的箱庭の実施時において、「二体の人形についてどのような印象を持ちましたか」、「これまでに3回行いましたが、自身では何か変化を感じますか」という質問を行い、研究対象者に自由に語ってもらう。

3. 結果と考察

本研究開始時においては、研究対象者全員を集団指導に編入する予定であったが、6名のうち1名については、所内の規則に沿った生活が難しくなったことから、集団指導から除外し、個別指導に切り替えた。よって、個別指導1名（以下、Aと表記）、集団指導5名（以下、B～Fと表記）とし、BからFまでの5名については、予定した計画通りの日程で本研究を実施した。Aの俳画的箱庭については、状況を見ながらの実施のため、必ずしも予定通りの单元の前後とはならなかったが、指導前と、指導全体の中間、そして指導後という3回実施の枠組みは守って実施した。また、集団指導の時間内に実施するイメージ調査票は実施していない。筆者は教育の場でのみ関わることから、今回初めて実施した俳画的箱庭等の研究対象者への影響を懸念したが、研究対象者を受け持つ工場担当職員（刑務官）の指導への理解、対象受講者への適宜の声掛けや筆者への情報提供といった協力体制が、本研究の遂行に大きく寄与し、本研究を遂行中及び終了後に、当該指導を受講したことによって生活態度等への影響があったとの報告はなかった。また、俳画的箱庭という初めての試みに、研究対象者が思いの外応えてくれ、多くの事を語ってくれたことに驚いた。

3.1 個々の指導過程から

各研究対象者の俳画的箱庭については、左から指導前・中間・指導後の順で、向かって下に研究対象者が位置する真上から見た図である（図1～6）。

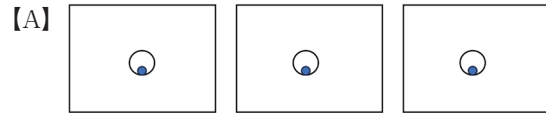


図1 A（左から前・中間・後）

Aは一人でいることへの苦手意識があり、生活を落ち着かせたいと思っても、夜間に居室に一人でいると落ち着かなくなり、結果として工場への出役ができなくなるという悪循環に葛藤を抱え、所内の規則違反を繰り返していた者である。指導開始時の意向確認以前から、生活の基盤が安定していなかったが、Aの所属工場担当職員と集団指導への編入を何度も検討し合い、期待を込めて編入させた経緯があった。結局は、編入後も規律違反によって集団指導に参加できず、個別指導に切り替えとなった。故に、他の研究対象者と一緒になることはなかったが、筆者が集団指導における受講者の発言等をまとめたプリントを配布し、他の受講者の考え方や捉え方に間接的に触れていた。俳画的箱庭の初回では、人形を目前に、しばらくは人形を持たずにいたが、白い人形を選び、正面を決め、すぐに真ん中に、自分向きに置き「敵から攻撃されても一番安全な位置」、「端だと外からすぐやられる」、「右下角から外は敵」と話した（図1左）。筆者が敵について尋ねると、「味方じゃない人達」と答えた。白い紙上は「安全エリア」、外側は実際に今いる面接室の、Aの目の前にあるテーブルだと述べた。現実世界では常に緊張があることを感じ、それは、受刑生活における落ち着かない状態であることも重なっていると考えられる。そうした点で、Aの場合は初回から、人形の視点と自分の視点が重なっているように推測できる。中間面接時は、初回面接時と人形を置く位置に変わりはないが、人形を手を持って回しながら凝視し「自分の方を向いている方が落ち着く」、「一番安心」と述べた（図1中央）。また、筆者に「右下とか置く人いるんすか。怖い。落ち着かない。落ちる」と言った後10秒程度沈黙した。そこから、日頃の生活においても真ん中に位置する場所に自分の身を置く習慣があることや、周りに人がいた方が落ち着くが、イメージには浮かんでこないことを話した。最終面接時は、これまでと同じ人形を手を持ち、回すなどして凝視した後に、「取りたくなる」、「この首をもぎ取りたい」と発言した。その後、初回・中間と同じ真ん中の位置に人形を置き（図1右）、「一番安心」、「自分がこの人形見てる感じ」とも話した。そして、自分の仲良い人が出所することから、工場にいる意味がないなどの気持ちを話した。人形の周りにいてほしい人はいるか、と筆者が問うと、いない、と答え、「今までで一番長いのは共犯だけど、お互いに捕まれば離れ離れなので、結局誰もいないですね」と話した後から、人形の底を右指でトントンと突き始めた。最後は人形を「部屋に持ち帰ってずっと（トントン）やっていたい」と話した。その時の様子が、少し寂しそうであった。MESにおいては、「視点取得」の質問項目に対して、指導前後で同じ回答をしている。「自己指向

性」の「他人の成功を見聞きしているうちに、焦りを感じることが多い」という項目について、「全くそうだ」と答えている。反則行為をせずに工場で就業している他の受刑者と比較し、それができない自分への焦りがそこに表れているように感じられ、俳画的箱庭で、人形の底の部分を手でつつき、人形を部屋に持ち帰ってずっとつついていたいと言ったのは、工場に安定して出役できず、一歩踏み出すことができずにいる自分を人形に映し出し、鼓舞する仕草でもあり、つつくことで落ち着くからかもしれない。Aの現状から、生活の基盤が安定せず、自分の気持ちに余裕が持てていない状況で、他者の視点で物事を捉えようとするのは難しく、それがMESの「視点取得」の変化の無さにも表れている。

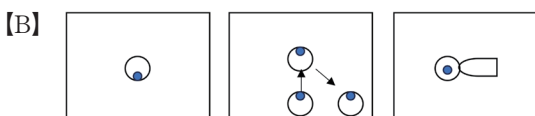


図2 B (左から前・中間・後)

Bは指導開始時には、受刑生活における目標が持てず、Bの所属工場担当職員から、いつ規律違反をして工場からいなくなるか分からないような停滞状態であるという情報を得ていた他、能力面において指導への編入に不安要素があった。指導開始後も、工場への出役に対する意欲低下により、工場担当職員がBに動機付けを高める声掛けをしていた。初回面接では、これから始まる集団指導への不安と緊張で硬い印象であった。初回の俳画的箱庭は、白い人形を選んで、本人なりの「きれいに見える位置」に置いた(図2左)。正面を気にしておらず、筆者から向き確認をされたことで、自分向きに整えた。場面は海をイメージし、自分がいる真ん中を波打ち際にして自分側が海だと話した。しかしその後場面は移り変わり、自分は一人または誰かと公園にいて、周りには家族連れや子どもがいる、自分はベンチに一人でゆったり座って眺めていると話すなど、場面が曖昧で定まらない印象であった。初回単元で実施したイメージ調査票は、絵は描かず、文章で「このような教育は自分に学べることがあるので何か一つでも自分に取り入れられたらいいなと考えています」と記載した。発表する際にも過度の緊張があり、表情は硬かった。中間面接の俳画的箱庭では自分の好きな場所のイメージを繰り返し広げた。「先生、この場所行ったことある？」と筆者に質問し、そこには、銭湯がいくつかあって、よく行くサウナが3か所あることや、他の場所のように人がかたまっておらず、散らばっていて居心地が良いと話した。また、「真ん中は止まっている感じなので動かした」、「前回と変えてみようという気持ちになった」と言い、紙上の位置を2回移動させた(図2中央)。そして、本当は人形を変えようと思ったが、正面にシールを貼る作業が面倒だったから変えなかったとも述べた。Bの好きな場所を目前にイメージしながら、同時に「先生」である筆者もそこに存在しており、筆者は面接室という場所にながら、Bの内的世界をのぞかせてもら

えた気持ちになった。最終単元時のイメージ調査票は、微笑んでいる顔のイラストを真ん中に描き、「ひと安心」という文字、吹き出しには「無事クリア」と記載した。イラストが描かれたことで、表現の幅の広がりとともに、本指導を最後までやり切れるかということへの緊張感があったのだと感じられた。最終面接では、今現在生活している居室内で、夜に、天井方面を見ながら横になっている場面をイメージして人形を倒して置いた(図2右)。「まだ出所が近くなったわけではないが、出所後について考えている」と話した。考えるようになったきっかけは、グループワークにおける他者の発言であったという。また、同グループ内に、以前工場と一緒に、よく面倒を見てくれた人がいたことも、安心感につながって良かったとも述べた。人形に対しては、「今までもこの子だったから最後もこの子にしようと思った」と、愛着を感じさせる発言があった。そして最後には、「目標を持つて大事ですね。本当は度々かもういいやと思った。けど、指導がもう一回あると思ってとどまったんですよ」と笑顔で話した。MESにおいては、「どちらでもない」との回答が圧倒的に多く、「視点取得」の項目は指導前後で回答がすべて一致している。結果だけ見れば、内面の変化が見えにくい、俳画的箱庭では、人形を変えようとしたが面倒になって変えなかったり、前回とは変えたいという気持ちが生じるなど、最初に置いた「きれいに見える位置」を自分で壊し、動かして模索し、迷いなく倒して今の自分を表現している。今回の指導を通して、目標を達成するという経験ができ、次へと前進とも言える動きが出たように筆者は感じている。Bの場合、「もうやめようかな」と思った時にちょうど本指導の存在が頭をよぎり、それがモチベーションになっているように、目標を達成する過程で、支えとなる存在の有無にその後が左右されるのかもしれない。今回は、Bが所属する工場の担当職員と筆者が、Bの生活状況について情報を共有しており、適宜声掛けをしていたことや、グループ内に親しみを抱く参加者がいたことが功を奏したように思われる。



図3 C (左から前・中間・後、赤い箱はカメラを意味)

Cは本研究前から筆者とは他の指導で知己であった。面接に限らず、集団指導においても、最初から率直に意見を述べる傾向にあったが、集団指導ではやや斜に構える様子があった。何かと自分の過去のスポーツにおける栄光話に引き付けて話すことが多く、過去の栄光という鎧を着ることで今の自分を保っているかのような印象であった。初回面接時から他の研究対象者に比べて筆者との会話には緊張があまり感じられず、俳画的箱庭では、人形を見せると、人形を手に持ち、位置を決める際にも戸惑い無く人形を紙面上で自由に動かしていた(図3左)。初めは映画館をイメージし、左下から斜めに筆者側にある映画のスクリーンを

見ていると語った。Cは自分の左に人がいるのが苦手であり、右にいてくれる方が相手のことを気にすることができると、位置へのこだわりを話した。人形については自分の肌色により近い方を選んだ。Cは紙面上が箱のようなイメージだから映画館が浮かんだと話したため、筆者が、その周りはどんなイメージかと尋ねると、周りは一面がラベンダー畑だと答えた。そして、人形を手を持って、右上に移動させて、そこから左側に向かって歩いていると話した。筆者は場面があまりにかけ離れていたため不思議な気持ちで聞いていた。初回単元時のイメージ調査票には、「お腹減ったな～」、「イライラしてんな～」、「映画観たいな～」、「イメージ湧かんな～」と文字を書き、吹き出しにも「全然何も湧いてこない」と記載した。ちょうど昼前の指導であったことや、工場での生活であった出来事を引きずっていることを説明として加え、率直に話している印象であった。中間面接時には、かつて真剣にやっていた空手のことを思い出して、面接室に来る前からソワソワした状態だったという。筆者がCの話聞きながら人形を準備して本人の前に置くと、前日に縁を切られたと思っていた空手の師匠から久しぶりに連絡が来たという出来事を話しながら、空手の試合会場にいる自分と相手の選手のイメージをそのまま表現した(図3中央)。人形に貼ったシールの色は、監督が着ていたジャンパーの色と重ねた。イメージした試合は、相手がけがをし、怖くなって、以降本気で戦えなくなったトラウマになった試合だと話した。その後も勢いよく空手に対する「やるならちゃんとやんなあかん」、「気合入ってる、緊張」、という気持ちと、その一方でやるだろうかという不安を話しており、筆者はただ頷きながら聴いていた。話し切った後には集団指導で取り扱った内容を思い出したかのように話し出し、「自分がしたことは(その後)影響すると思った」、「怖い」と述べた。最終単元時のイメージ調査票には、右下にコーヒーとご当地パンのイラスト、左上に風呂の絵を描き、吹き出しには「風呂入りたくないな～、ご当地パン食べたい」と記載し、ご当地パンは、出所後まず最初に買って食べたいと思っているので描いたと話した。最終面接時は、これまでの勢いがなく、出所後のことを考えると何も出てこない、外を見て遠方に暮れている状態を表現した(図3右)。外(紙の外)は草原と言う。しかし、「前進」、「やっていかないと」という気持ちもあると話した。また、初回・中間とは人形を変えた。その理由は「愛着が湧いていたが、せっかくだからもう一体も使いたい」というものであった。そして、初回に選んだ色の人形を見て、「なぜそれを選んだのか」と疑問を口に、「前は自分に人種差別的な、白・黒みたいなのがあったのかな。今はそういうの無い」と自分なりに人形を変えたこと理由を考えて話した。そして、人形を筆者が作ったことに触れ、「自分も出所したら紙粘土をこねて作ってみようかな」と話した。最後の面接で、出所後のことを考えると何も出てこないという状況を人形で表現したCに対し、筆者は、現実的で地に足がついた印象を持っ

た。中間面接時の「空手」の話で、集団指導では話さなかった「トラウマ」という言葉を出して、怖いと感じた場面を語っており、抱えてきた負の感情を、人形を介して筆者とともに眺めたことが、現実世界を受容することを促したように考えられる。自分の行為の影響について考えることで怖くなっているように、MESの「視点取得」の項目においても、他者視点に立てているという質問に「そうだ」と答えていたところが「そうではない」に変化しており、思っていたほど自分は他者視点に立てていなかったという気づきがあったのではないかと推測する。

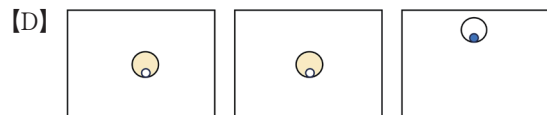


図4 D (左から前・中間・後)

Dは、当該指導の受講に対し「受ける必要があるなら受けますよ」という義務的姿勢の受講者で、集団指導においても、前半は「他のやつらと自分は違う」という雰囲気醸し出し、つんけんした印象であった。初回面接の俳画的箱庭では、生成り色の人形を「こけしみたいですね」と言い、こけしに見える人形を選んで、真ん中に人形を置き(図4左)、真ん中以外に置くことはあり得ないこと、決まった場所に置くのが自分の価値観で、「周りに何かあるとしても、中立的な位置にいる」、「先生に見せるなら先生側に向けるけど、自分だと思った」と、位置にこだわる発言をした。初回単元のイメージ調査票では、「どんなことをするのかソワソワと気になっている」という文字と、こけし人形と?を書いた吹き出しの絵を描き、吹き出しには「初回の教育なので頭の中ではハテナが浮かんでる」と記載した。その際のこけし人形は、最初の俳画的箱庭で使用した人形と形が似ていた。中間面接ではやや慣れたように「こけしですね」と言って同じ人形を持ち、真ん中に置いた(図4中央)。初回と置いた位置には変わりなかったが、真ん中に置く理由として、「自分の性格、こだわり、自分がここの決めた場所に置きたい」、「移動されるとイライラする」という自分のことに焦点を置いた話をした。途中で人形を持って、紙上を動かし、じっくりくる場所を探したが「どれもじっくりこない」と言った。「先生ならどこ置く?」と筆者に聞きながら、「端は崖っぷちで怖い」、「でも、賃貸部屋なら角部屋にする」と話し、角部屋から思い出した飼っていた犬の話に変わる。基本的には自分が決めた通りに進めたいが、飼っていた犬のためなら生活スタイルを変えていくとの言動に、優先度によって対応が変わっていく様子が表れた。幼少期に大事に育てていた金魚を母親に勝手に捨てられたことも思い出し、ショックだったと話し、その頃から、自分の物に対する執着、自分の物は自分で決めた場所がないと嫌だという思いが強くなったのではないかと筆者は感じた。最終単元時のイメージ調査票は、「今日で終わりかー」と文を書き、8人(筆者を含め指導者3名と受講者5名)のグループワークの絵を描いた。吹き出

しには「今日で最後の教育だー。早かったなー」と記載した。後半の单元では、他の受講者と意見が割れた際に、「そういう考えもあるか」とつぶやくことがあり、他者の意見の受け止めが見られた。筆者は、中間面接までのDの様子から、最終面接時も人形を変えず、譲らず真ん中に置くだらうと推測していたものの、これまで「こけし」と言って選んでいた人形から白い人形に変え、その人形を持って「どこにしようかな〜」と紙面上を動かして遊んでいる様子が見られ、筆者は驚きと嬉しさと感情が揺さぶられた。そして、「まっさらな感じで道を（自分側に向かって）歩いている」、正面に貼った青いシールの青を「青信号のイメージ」と表現し（図4右）、人形を持って紙上で動かしながら「うねうね、真っ直ぐ、斜めとか、寄り道もあって、どんな風に進んでいくかわからないけど、その先に将来がある感じ」と話した。今まで選んでいた人形を「濁っている」、真ん中を選んでいた自分自身を「真ん中に居座って陣取っていたと思う」と言い、「今までは出所したら金貸してた奴の所に行こうと思っていたけど、もういいかなって。行ったら、また付き合いとか関係が切れなくなる」と話した。これまでの頑なな姿勢がほぐれ、新たな気持ちでやっついこうという気持ちが人形の色に表れたように感じた。また、自分をやや離れたところから俯瞰することができるようになったような印象を持った。そして、皆と一緒にここからスタートで、これからは何色にでも染まっていく未知の世界であると話した。中間面接のあたりから、筆者ならどこに人形を置くか、と尋ねて、途中で人形を持ってしっくりくる場所を探したり、集団指導で他の受講者の意見を「そういう考えもあるか」と受け止める姿勢が見られたのは、これまでとは違う視点を取り入れ、可能性を含んで物事を考えられるようになりつつある変化と見て取れる。指導後のMESで「どちらでもない」という回答が増えたことにも、複数の可能性の中で考えられるようになったという変化が反映されているのではないかと推測する。

[E]

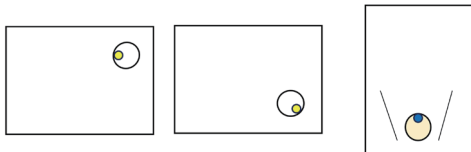


図5 E (左から前・中間・後)

Eは社会において引きこもりに近い状態の生活を送っており、受刑生活も、他者への不信感から集団指導への参加に不安を持っていた。初回面接では、人形を前に「えー」と戸惑いながら白い人形を選び、20秒ほどかけて本人から向かって右上に置き（図5左）、「すぐにとかできない。適当に置いた」と話した。位置はそれほど気にせず、人形の出っ張りなどに反応し、「鼻のような出っ張りがあった。だからその上が目かな」と述べた。人形から、「スクールウォーズ」という映画の登場人物をイメージして、「試合に負けて落ち込んでいる」、「絶望して、信じたくないと思っている」、「人が散らばって落ち込んでしゃがんでいる人

もいる」と、その情景を話した。人形を再び凝視し、色からスターウォーズのキャラクター、目玉のおやじ、クマのキャラクターっぽいと、連想していった。白い紙の外側は現実として認知し、面接室内の時計があると述べ、自分は登場させなかった。そして選ばなかった生成り色の人形を見て「デイスリしか出てこない」と言って笑った。初回单元のイメージ調査票では、「ざわ・・・×5」と枠内に文字を散りばめ、吹き出しには「いろいろな感情が出来ていてそわそわしている!」と記載した。集団指導開始当初は、毎回グループ内において緊張による腹痛を訴えた。中間面接では、「外見て曇ってるなー」と思って置いたと言いつつ（図5中央）、人形は前日に読んでいた漫画のキャラクターに例え、漫画の中に登場するキャラクターの色と人形の色とを重ねていた。次第にそのストーリーの登場人物の中の敵や一番嫌いな人物の話になり、社会性のないしゃべり方が嫌である、と自身の価値観を話した。筆者が、その場面の中で、Eはどこにいるのかと尋ねると、Eは、その世界に自分を登場させたり、この人形を自分とするといったことは気持ち悪いし、自分が登場するとその世界を壊すことになると話し、卑下的な自己イメージに感じられた。最終单元時のイメージ調査票は「早く夏ごろになってくれ! やっと3月になる! イライラ」、ピエンのキャラクターの絵、右中央寄りに花丸の絵、タモリの絵を描いた。吹き出しには「精神的に不安で疲れている」と記載した。初回のイメージ調査票に比べ、自分の気持ちの表現が多面的になったような印象を持った。最終面接では、これまで使用した白い色の人形を眺めて、「この人形は持って帰れないのですか。部屋で眺めて笑っていたい」と発言した。筆者に対し、「いつも笑っていて面白い、イライラしないのか、仕事で笑っているのはいいですね」と話し、まるで人形と筆者を重ね合わせているかのようであった。「せつかくなので人形を変えたい」と言い、人形を変え、さらには、紙面に「線を描きたいな」と言って、鉛筆を持つとさっと二本の線を描き、その間に人形を、筆者側を正面にして置いた（図5右）。そして、「道が開けてゴールがある。ゴールは白くぼやけている。先は見えない。でも今日先生と話して考えたことがある」と話した。筆者が、これまでの表現と違うように感じると伝えたと、これまでキャラクターに例えていたのは、現実から逃れたかったのかもしれない、考えたくなかった、現実逃避だと述べた。最後も人形の見目から連想するキャラクターの話をすると思っていたことから、現実的な話をしたことへの意外性に圧倒された。人形の色は生成りで、青いシールを選んだが、その青には「ドラえもん」の意味が含まれており、何でも出せて未来に行けるドラえもんになりたいと話した。筆者から見た最後の面接時のEは非常にすっきりとした表情の印象であり、人形を変えることで今までの世界とはけりを付けて（しかし、心の中にはある）、現実の世界に身を置くことができるようになったのではないかと感じた。MESの「視点取得」の項目は数値的には変化がなく、回答は「どちら

でもない」の回答が増えており、俳画的箱庭での変化が読み取れないものであった。



図6 F (左から前・中間・後)

Fは、受刑生活はそつなくこなし、問題行動なく生活しているように見えるが、内心ではなぜこの刑務所で受刑しなければならないのか、他の受刑者と一緒にされたくないという、他の受刑者をやや見下している節があった。初回面接では、最初白の人形を選んだが、「やっぱこっちかな」と言って生成り色の人形を選び直した。そして、人形を持って、Fから見て右寄りの真ん中の位置に置いた(図6左)。自分から見て下は悪い方、上は社会的な、家族や仲間がいる方、下には刑務官しかいないという。右は未来でまだ見えず、左はこれまでの、小さい頃からの軌跡と述べた。人形から過去を俯瞰してみているのだと言い、白の人形にしようとしたが、下の紙が白なので生成り色を選んだという。そして「何を見られているのだろうか」と思ったと話した。初回単元のイメージ調査票では、本人の居室の天井から見た図を描き、吹き出しには「刑務所だなー」と記載した。やや構えた印象で、淡々と目前にあることを答えるというような様子であった。中間面接では、人形を「なんか可愛らしいので」と、初回面接と同じ人形を選んだ。前回置いた場所よりもちょっと進んだ感じと言って、少し右寄りに置き(図6中央)、出所が見えてきて、幸せ寄り、ちょうど外では雪が降っており、景色は雪だと話した。途中で、「やっぱりもっと左かな」とつぶやき、「先生と話して、色々聞いたりして、位置的には、出所からがスタートで、そう考えると今の自分の位置はもっと左寄りではないかと思った」として、人形の位置を変えようとした。しかし、不安要素はあるが、気分的には暗くないと言って、結局は変えなかった。終わりに、「これ疲れますね。結構考えちゃう」と話した。最終単元時のイメージ調査票は、右上に虹、太陽、真ん中下にのひらの絵、右下に8人の涙を流した人間の列を描いた。吹き出しには「最後で悲しいし会うことはないと思うけど、明るい未来を信じましょう。」と記載した。読み上げた様子・内容からは、柔らかさが感じられ、初回単元時に感じた、構えた印象から、角が取れた印象に変化した。最終面接では、「今日はまだ考えてきました」と言って、生成り色から白色の人形に変え、正面を決めることも忘れて、人形を紙面上の真ん中に置いた(図6右)。真ん中でどっしりとしていたい気持ちを表したと言い、前(右側)を向いて、何色にも染まっていない状態で、ふらふらしないで構えている、と話した。自分はもっとできると思っているので、真ん中より右側に置きたいが、まだ刑務所にいることを考えれば、そんなことを言える立場ではないという気持ちから位置を決めたという。Fが筆者の視点を意識し、葛藤しながら、自分のもっとでき

るという自信と、犯罪をして受刑者として収容されているという現実とを人形を置く行為によって確認・整理したかのようにであった。MESでは、指導後の回答に「どちらでもない」が一つもなくなり、曖昧さが無くなる他、「そうだ」と「そうではない」との回答が指導前後で逆になっている項目が多くあった。最終面接時の様子からは、他者視点を意識し、自覚が芽生えたような印象であったが、「視点取得」の数値は下がっており、MESの結果からは、面接で感じたような印象を決定づける変化は読み取れないと感じた。

3.2 俳画的箱庭

俳画的箱庭を導入するにあたり、筆者は、研究対象者が人形にどのような反応をするのか、不安が大きかったが、筆者の不安をよそに、一人一人色の違う、豊かな内面の世界を表現してくれたことに驚いた。人形一体のみで、彼らの中にある、他者の目には見えないイメージが、人とその周りに凝縮されており、ウィニコット(1979)のいう「中間領域」のような、研究対象者が持つイメージを映し出し、筆者とそれを共有するような空間の領域があったと考えられる。また、彼らが語った内容は、決して自身とかけ離れたものではなく、いずれにおいても自身のものの見方や捉え方が含まれていた。筆者は、人形が人形の形であったことで、「人」のイメージを持ちやすく、自分自身とも重ねやすかったのではないかと感じた。また、人形は、施設内の物品制限もあり、研究対象者が持ち帰ることはできず、毎回の面接の時だけ使用することから、肌身離さず持っている人形やぬいぐるみとは、少し意味合いが違うかもしれないが、筆者が一つ一つ手でこねて作成した人形に、研究対象者から「愛着がある」、「なんか可愛らしい」、「最後までこの子」と言って、大切に扱ってくれていたことから、研究対象者一人一人に、「自分だけの人形」が与えられ、手に持ち、正面のシールを貼った時から、「人形」の持つ意味が変わったのではないかと考えている。そして、最終面接時には出所後のことや、今現在置かれている状況、心情を話す研究対象者が多く、面接の中にも指導という「枠」が存在し、集団指導の最後の単元の目的である「自己未来像について考えること」が反映されていたように感じられた。

3.3 イメージ調査票

イメージ調査票は、指導の過程における個々の内的イメージの変化確認と指導の流れを作る促進剤として筆者が作成したものであるが、指導開始時と指導終了時において同じものに取り組ませたことで、個々のイメージの変化と、描き方の変化(文字だけか、絵もあるかといったこと)を見ることができた。集団指導の中にも、これまで取り入れてこなかったイメージの表現を取り入れ、それをグループ内で共有したことで、他者視点の取入れだけでなく、自己表現の機会ともなった。また、指導者側にとっても、言葉や文字のみによる表現には限界があり、イメージの共有が

彼らを理解する一助となった。

3.4 MES

本研究対象者のグループの指導前後の結果の平均値を本研究前までのグループの指導前後の結果と比較すると、指導前の「被影響性」尺度の数値が低く、指導後には平均値よりも高くなっていた他、指導前の段階で「想像性」の数値がこれまでの平均値よりも高いという特徴があった。本研究対象者は6名と少数であり、今回の研究の目的はMESの結果には見えない変化の視覚化であるため、結果の数値的側面については言及しないが、AからFまでの個々の結果から、MESの結果では同じ数値であっても、その回答に至る個々の捉え方や背景は異なっており、MESの結果からは読み取ることができない内面の変化があることが分かった。

4. 総合考察

本研究において、刑事施設の中で俳画的箱庭の導入ができたのは、これまで継続的に実施してきた財産犯再犯防止指導という指導の枠組の中に、個人面接という位置付けで、あくまでも補助的な役割として盛り込んだことによると考えている。刑務所という厳格な枠組の中では、所内指示で定められていないことの実施自体が難しい。刑務所という特殊な、社会から壁で隔たれている環境の中で、特別なことをするというのは、指導者にとっても、研究対象者にとっても、非常に侵入的で危険なことであるため、指導の終結を予め設定していたことが、彼らの生活における「枠」の区切りとなり、彼ら自身が意識的に終わることができたように感じている。また、本指導の枠組の中で、集団指導における「他者視点」の取り入れと俳画的箱庭による内面の外在化（個々に自分の立ち位置や頭の中にある考え・イメージを外在化）とを、交互に行ったことで、徐々に自分と向き合い、整理したのではないかと筆者は考える。一人一人に必要な時間やきっかけは異なり、個々の変化の過程は違うが、指導者と関係性を築き、「枠組」を持って関わることで、自覚と変容を促すことができるということと、個々のペースは違うものの、確実に変化が生じているということを、研究対象者の内面で起きている変化の視覚化によって証明できたように思っている。これらは、MESの指導前後の結果確認だけでは知ることのできないものであった。

本研究の対象となった財産犯再犯防止指導も、研究対象者の未来への意欲を持たせる動機付けはできているものの、考えることで終わりとなっていた節があり、現状その次につながる指導はない。改善指導の目的が受刑者の再犯防止であることを、机上の空論としないためにも、考えたり望んだりしていることを外在化し、動機付けを高め、所内で少しでも実践できるような、流れのある指導作りが大切であると考えている。それは、現場で勤務している職員の多くが感じていることでもある。今回、指導の中に俳画的箱

庭を取り入れたことは、既存の改善指導にはない、受講者の自覚と変容を促す一つの新しい試みであったが、改善指導の枠組みの中でできることを今後も模索し、いかに実践していくかを課題として、引き続き考えていきたい。

5. おわりに

本研究を終えて、筆者は研究対象者とは関わりがなくなったが、本指導が楽しかったこと、印象に残る単位があったこと、意外な発見があったことなどを話していたと間接的に耳にした。指導は終了したが、今後の人生において、何かの折に触れて指導のエピソードを思い出し、それが犯罪の抑止力となれば幸いである。筆者も、この貴重な関わりにおいて感じた多くの学びを次に生かし、微力ながら再犯防止につながる「種まき」に力を注いでいきたい。

謝辞

本論文の作成にあたり、多くの貴重なご助言をいただきました放送大学大学院佐藤仁美先生、波田野茂幸先生、倉光修先生に深く感謝いたします。

また、本研究にご協力いただいた被収容者6名及び施設の皆様、そしてゼミの皆様は心よりお礼申し上げます。

文献

- 安藤有美・新堂研一（2013）「非行少年における視点取得能力向上プログラムの介入効果、教育心理学研究、61、181-192
- 石川隆行・内山伊知郎（2002）「青年期の罪悪感と共感性および役割取得能力の関連」、発達心理学研究第13巻、第1号、12-19
- 井原成男（2006）「移行対象の臨床的展開 むいぐるみの発達心理学」岩崎学術出版社
- 河合隼雄（2012）「箱庭療法入門」誠信書房
- 河野壮子・岡本英生・近藤淳哉（2013）「青年犯罪者の共感性の特性」青年心理学研究、25、1-11
- 鈴木有美・木野和代（2008）「多次元共感性尺度（MES）の作成」、教育心理学研究、56、487-497
- Selman, R.L.(1976). Social-cognitive understanding: A guide to educational and clinical practice. In T. Lickona(Ed.),Moral development and behavior(pp.299-316). New York: Holt, Rinehart and Winston.
- 水島恵一（1985）「イメージ・芸術療法」大日本図書株式会社
- Winnicott, D.W. (1971). Playing and Reality Tavistock Publications Ltd, London. (ウイニコット.D.W著 橋本雅雄/大矢泰士訳 (2015)「改訳 遊ぶことと現実」岩崎学術出版社)